花園奇談 夢見草

へ遠ふ
469
1

へ13
469
1

遠へ13
門
號 469
巻 1

長崎町五丁目
大野屋惣八

夢を信ずる人有りて人
是を嘆りて曰聖人小夢か
志を信ずハ愚庶の勤り
然ども信ずる人乃曰昔文王八紂
を畏て囚ぶ小呂望を用て
囚ハ獲ふ松の如くに畏て

三公ふきみ物以何のごとく大臣天
を爲て第ニ十九番の富れ
をこのひ芸尾西をひらく陶
さんば爲をも誣ゴ[illegible]の物
爲をゆづる物語を学
高まらぶ はしがき

序

見渡の爲人ざまをおもふ
しる所文らものたのざめを
あるたのバ筆さいをらん
いよ

初東子

國英画

多慈しん所て出板露申上ゆ

一 極上酒三ツ割壱樽代十六匁ゆ

一 同 中板壱升 弐百八十文

一 同 味林醤油品々

京橋具足田丁 伊勢屋喜左衛門

花園奇彈夢見草壹

福東子玉雄戯編

第壹回

ゆきもとの業弘うぐ人のこゝあるうんゆの数を
つゝそはと伺がしの大人のよまゑさうゑいとも
たゝふとゝさことのゝ有りゆ世うう金持も冥途へ
さなゞへもうとゝさゝ人業子孫宝ゆよゝゝゝゝゞず
ゐゞうゝ字の念仏弐十万信士の小をとゝあゆ

老たるものの世の中やあるを考へるに身の欲深
くて子孫二世の福もうすくてひとへに財を付て
係べる金の富ばかり買てもあることなきを
ありつるが身へつゞかぬ財のうけひくる事稀あを
べ信徒の種をつゞく世よりまれおさてこの孫は業
花を作ゝ〳〵しくてよみるものの
ぞうりハ孝をつゝ信徒をあせるむつひよ
ありてこれのあつれをかゝむり爲命の

男ふつひこ業花の身と子孫をとゝ考へ
ていさゝかおさまいくちをくのそつれと
ものそのいとぐちをたづねるまをはのゆびハ
のつつうゝのあとり花そのくさとゝいくるあよ
漣浪ゝとといのありとり父ハ孫右衛門
とよびくすこぶる豪富なりしが老年
あくしてまづしきみとなりしゝ浪ゝ
二ッのとりよ出ハ出ハとゝいくるがこと

十ゝなるまうをつゝまして[illegible]とかさ
ざやとて東のうゝこんざりるまう浪ゝ
ハ母の[illegible]よりて生まれつゝ[illegible]孝ゝ
ふうゝあけられ母まつうんておゝてることと
ゝとゝいどもまづゝゝして孝[illegible]とうく
すとあさいぞうまうりてゝきで
と為ゝこゝと爭ゝまゝていどく[illegible]ざ[illegible]
[illegible]をゝうゝ母のうゝめむゝめとゝゝいや

まあ母うまつゝんゝりり浪ゝゝ九ゝまうり
りるとゝさのゝゝうゝや母ハ風のゝゝちあく
うりゝゝうまうちゝゝりるゞ[illegible]まおく
ありあゝさゝゝりもゝゝまゝゝ孝ゝゝく
せんゝゝいすゞくまゝんざりり浪ゝゝん
をゝさゝゝこいんゝどもゝゝゝゝゝまれま
まゞ母のゝゝりゝまゞゝまゝゝゝゝゝゝゞ
ゝくゞうゝんりるをゝいゝうめゝゞゞ

うまづが孝行をあらはしてはぢをすてかへ
さうしつまことや古人のことのそなへとの
ゆゑひとかのわらはをうるめへ祇仏まつるゆ
ゑにもおろそかすべからずノ又
いぞうひてゐる人へ橋のたもとの乞丐の一人
でゐるをひとりかなつねなるあり
ともろうぞうぎうひべからずとぞうく
ひしまてをさるをさんはかいろう

されどもこの人のこころの内いろりりんと
おもそらられてあるとのこの比母へあさ
ひるをたべさせくるどもあまづし
りまをとひべさせこころをあ浪こころへ是
をうまひこころの内はよろこゆう母のこころ
よおをすとさへ海ようろさ汎想とうみ
いまらくこひとんて医療もんよ
まうせれのこころのこまんるものをさん

まゝ〳〵せゞくんをあたゞ〳〵さふ孝たろふ
よもーて色とゝとゝあまゝ〳〵せたゞやと感
志あんをわゞ〳〵て母よむろひでいひろふ
渡さのゝ熊四の人のたゝ〳〵よさてまー
こゞ格のゝこのとゝでさろあゞさんとつまろと
ヤまんろういつこもゆさまーて約てまり
義てあげやうとなまん母ヲよう義ゞ付
やさゝゝまを程さとろ切よんゝてトこるゝあ

一ノ七

さのふゞんさかんよむう〳〵の月であるべこ
のまゝも終社とうけ風よもあゝくせまいの
まこざろあゝろう買ふるのでさざるやうま
あるのゝろ加てゝくゝ社扁年年たも行
ぬゝゝさまへ日ゞあ一日ろうとうけかこ付
楽あゞひもこせず父はかゝゝこの二ツの
河東へあゝゞろあされてろゝゝとこ仙のこと
もあ〳〵世ゞよゞであゝべゝあゝとべ乳母ひゞ

さて前ろよ世間者といひあげうすをぬかまとの方法ゝまくでと書るやうよして業とせんじうあとさき我の因も孫ずにうひうもるそあさのやうあ孝行のの仏の因果でひ形まあわせるいろうがよ生れて来ゝぞとゝ変かあまてくむ一ぷいよあうまもとつぐ丞のそでとあよ尚よくとだうよ法ふゝぬ渡ゝもゝ元

一八

よ涙をねがひたくのうえよをとつさて渡

又その中ゝあるのぞうあつ書りますそん

あとゝをゝしあすとうんりて病身ぐうり

ますそれ祝ゝさゝを可愛とゝゝやして

ぐされますあうゝ祈てまゝり中に仏さうか

をさんとおあぐりあうれまゝてさやうお迎

老よおありあされて下さりませといさゝ

ゝどゝいゝぐあ仏はかあいさゝぐんさいや

まして母へもさんざうさくだうまの
ゐどもへあらく八ッ九ッのとしこそ紙おき
も母のをとをきゐ紙ていぢると天とおう
まくなぢちといさうひ泣せこまこうゐ
うせうゐやけうぢもけぢでもきやつさ
うとこんのうあることだうそれはひさう
へおとあらく用ゐさるはうどへも生す
内はだううりあるかくせわてつうはでも

一八九

ゆきこうあうそれもきづこんあんどーてはごろ
のうさもきこうのうはきれてんをゐぐさむ
べーと洞でおさんていひるるかう 母それあう
つうはゆくがはのうあうずけがとせぬかうは
魚へ殺ぢとはへ行はおあつてやさんや 源
さかうあうあう殺はやおりかすお独でお林こう
こぢうまきかうがの殺のうでぢうまかすお行
あうこそおいあうこと殺さと殺こうこ

うちうちけつこをかうへいさう母のるすとき
こさをはをそこまよ紀おさ大津の町よりこ出て
往来の人のうちさ着物をうつぎまこ〜の
袋庭とりこい芝こまて魚をうひりとあるごま
へていくまうこり紀田のこうまこ物ひ〜と
母まいひてでまこめりうくのごくして
日ごとま魚をりとありこまある日大きやう
るる紀とりとあつうちうこまこ金のひろり

あり浪こうこあやこまて母まえまれべまく
も寿昊のこひとあ〜浪こうこ殺りこいへ
らくむう〜梁の南紀の大弓劉之亨とい人
人のりとこ李性の人ふこうこうこうてこが金を
助ふこといとこ若ふこうこ伯るりまやとこひぎを
こひ〜まあつるり二足の紀とおるこ紀とあり
こ亨人〜こ美こし〜こうこ芝こりとありひ
川まこおもりありうとこひ紀へこれとおる

むさたづみといへども是をこそ きよまきのびざ
ま べ湖はまきのうぐゐといふ浪こそもを
もと同じ琵琶湖へおりてそもちゆりくべ
忽ち尾とふり和れとうごうてきづくく
ゐようこそあがりついとうまてげをどり
つこそあそこ浦くきづこりう浪こそ出よ
こうこはありさまとりのぐまべ毋八大よ赤
びりまぞよ代日も山をえてゐの折る

とおりへこそ浪こそうつの戸をかくとおと
づくあり紙と官まるこくるの宿舎を
助こまこのつまはてへ青そのはれを
ヤムこ弟まこりくこうといふをあみ内よ入
てこまとこんこよあてゆこること海ようける
こ女のこと浪こそむひて曰こくこ夫父
のおわせよそむくこと待りて天帝のよこと
こふむりへの弟よとこそれこうこうこと変

まれ牙母子まさすみられたるびゆがてき家
を全せりれ牙が孝んへを孝くより天帝きを
しわ一及だれて百拜をとぐ一ちんとす
ぢどもいまぢ前世の業つきざるまようく
そのとゆ孝ぢ夫のゆくも四牙が孝んよ
よりてさすうんべうの母へひぢもむ
ちうくよりゆ行ゆ一これよむくゆるよ家の
義ゆしよりて跪ようより天帝よ奏し母

一十二

刀角のとぐきとのぐしまうすべし父前生
のつくとちうゆ一ちんよへるゆでくまう
でくまひ前世ゆを行ゆ善つ昔へ補ちん
そよう九年を経てるゆまて福とゆるゆある
べし四牙が牙のうへへつくへ夫婦がやうべし
いうとぐくゆ義宝のあくしのまうまうまし
て拜へのぐとあゆまりうそれようして
母の病も四牙全快ちんべ限ちへ

大よろこび親のをしへ世間をよく
心よりわり前世のつみを滅せん為善つ和
をろらひよく意をとろく 懺悔 つ世の
といづまみるべく含べ心空といく
ゞゝ織ぞして兵ゞやこぞして合人
ところりぐこれのめるれば限こへをき
ひつのこへとひろんまこのひろへ
世を出てひくびとれり秋へ丘辺を草とり

芝を市ゟ拾出て来ぐ衣ゟあて栗ゟ入
りれべうゞゟおひつゝびんぐうゞゟとゝ
ゝたのごくおづうゝ富るゟあらざれども
うへぐこぐへぐ母ゟもゟ世を学らうゟ
おりりり嗚呼孝ゟるゟ山ゟ全九ゟの
附ゟり母を学ゟゝと牡大人も学べうゞ学
余ゟてさまぐの苦ゟまるとゝどもん
ゟ皇天のおりまゝとゝをゟもりまゝゟいりて

大幸福を得るに出でたるの男女子の一
家をいう為教戒如何様へ扱ありて月
日の車のめぐりの早きと韋駄天を車
力にかけてもとそらするがゆへまた
さく内は九年を限て浪三〻〻十八少
よぞなりまるる

第二回

〻〻三月の初めより石山ちの新世
話冥帳ありられば主人の恋慕の結縁の為
とて案内するのおびゝ〻しく拵く尚只
良辨聖の冥基まして業創のむかしより
今よいまるまで大悪の利益むかしからず
就中この地へ八景の新たまして月を仮て
なぶりの第一とまれども又このごろの花の

ゝ中くさとぞよてそゝぐゝまこ
ゝや大慈大悲の雲の花八十葉の蓮をか
ほ三十三身の秋の月八面圓の形よ新清
く一稱一念の功力よりてへいろゝるつゝも
徹さとゝくゞあもゝふとゝさ夫場なり
ゝふ大洋の商人よ袋猫太郎とゝゝめ
ありつまい船の商人の浪よて袋をおかゝど
ぞよひゝりゝを代あゝさつゝひてゝゝあゝ

ゝあるゝゝせゝよて何ひゝゝゝゝゝねとゝく
ゝゝゝて金銀入ゝゝゝゝゝゝとゝどもゝ子
たゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ夫婦ゝゝゝゝ
を深くゝゝゝゝひゝゝのゝゝんあんよ形樣ゝて
一子をさゞけたまゝれとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
袋ひゝりあゝゝゝ歌袋の形ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ありとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝよゞゞ猫太郎夫婦ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をそるよ玉の女子ありつまのおうぢ
ハあつとよむひ 書 代よれぎやりんあやた
ちもあるべあるりのやけ世のこですとるの
つるこうあれうこでも孫子と妻子とヤ
まれそれをマアをそるといふ人ちうたぐりの
よもおとうしあのといふまの是も又
をそるしハあるまのうが家義あいこけてで
ぎりまをあうぎ何よりとせ可愛さうぐく
平六

ぐざりまれといぐこきあぐるべあつこと
いうこうれの妻らさけあぐうみハの
紅梅の親てふ妻のあをぐをろこびう
る風情ちり妻ハ可愛さいやまてまよ
むひいうこハあぐうけるかあいうてく
ありませんひうて用のあよぐうふ
ぐざりまれといハぐあうぐもうあづきそ
福 おまもさうあつて今うきねよさう

ぶん吉ゆうとおもうてこころづよくこうこ
そうぶん〳〵こうり一時まんぞくあいたハこ 喜
吉やまぞへござりません 福 あよ吉やまを
りのうこまうんやこころよちりぶりろがこく
てあるいづまを吉そよまへちぶ袋う家宝とよ
ゆうあこめがこへくあるりのぶ是ぶ吉ゆう
こよあつく吉まいまへ実のあやよ名のり
あふといふりのへるぞうーてえあさ

あまがあるうあけこえゆうとひろさえ
るよ内よハ一ま八分のらんぜおんの子孫
ありりれべふうふちよよろこびこれ日
ごろしんこうあ〳〵る観世音のさづけた
まへるあるぐしとひろへとうお舟と名づ
けうぞとこえんこくこぞくりかくて宝蔵
矢よりもあくく白弱のひまとさぐるごと
くここやうみてお舟ことー十六年よ

ぞ多りよりの紀粉とうさんども新さ
ちのうらはしさことゐはてさざ〳〵あ
るんまてつうり出せるがと〳〵かの竹取の翁
ひろんえ〳〵かくやゑあといとをもううん
あうじとゐのたうりぞつとをるゐどう
つく〳〵ことろざま優よやさしく
おさ物のたいさうものぬひを書
ことゝのれよろずの蘆よつさるうゝず
一十八

はおやまつうんそ参り多り書らび福右衛
夫婦のようこのとこちうさるうずもまさ
ま切世言の以利益ようて氣ようかくう
ゐとさづけゐんるるべし〳〵と伝ひ日ごろよ
りやまう〳〵りあるひあるべふうゐ嫁と
つ是右山の荒悔よ治んとゝ乳母と家せま
のう〳〵あきれ如ゐうその臣ゐ人借よつき年
の具ふくこうひよ大はの家を三出け

さころへ三月の初るめば人のおもうさま
てまぎさ〳〵さるいとぎろうあり〜道す
がうのとるどひらぐく きりめべるまいく
ずは日浪三ろう山も石山よ清水堂よあるく
倒のごく経文を演説〜てゐるをうろう
いとたふとげるる僧のさろう服ろうをえ
ていろくいれれ山ず人を点ろまよ
若ずを行ひ治徒をるせる報よりあ世の
一十九

つくことぐくめ書ろるべきろうずして猫
さるるぐ〜又中年よりて大るる猫あるぐ〜
されども山ずの行ひよりて山猫へのがるる
るるんを山王へ供へ人つ五て系治をせる女
見山ず書とるるぐさりされども山女未
罪障をろびざれべ一段あやうさるありと
いどもつひよ命と今ふて山ず と愛交支
妙とるるぐ〜そうるが接山くりのあるへ何

まてもひろひれべ〜是福をゆるのそでゆ
ゆあくうさぐくるゆ和ゑをとゝ行ゆごろよ
とゝさゝとゝてうゝさりすゆうよ光より浪
ゝゝゝゝ高吳のゝひとを和〜忙行とゝてゆうゝ
りり付財福ゝゝつ丈姫ゝ浪とう五一就世吉の
四茶よぬゆづされ和ゑるをりうよ姫ゆ
さてうりんざしの不家ぬけ出てうゝく
和り浪ゝゝゝゆ高ゝよりう姫をゝとゝんと

てゝゝゆゆえうすゆ新とゝ和ゝゆひまうゝうと
さやくをうゝもゝ丈姫ゝそれとゝゝゆれべ
吉ゝうよ浪をゝそゆゝて仕業のそゝく出よ
りり西よ是茶世の高縁何そ氷人の口を兵
くとを和ゆん家よ高とゝゝいゝん姫とゝいそ
ん浪ゝゝゝゝよのうゝちのゆをとゝ吉てゝゝち
ゝて吉ゆゝえとゝをてゆうりゆ是彼傍
の告ゝりゝゆゆ書とゝもうる人ゝいゆく

の人の娘みやこへもろくも此金(くご)段兵衛(ちべえ)を
ゆるさしまくんとふの内よりろそびてもと
ろまゆしてくりろ